

今日は最初に、私が中学校の時、校長先生がしばしば朝礼などで話していた、その校長の口癖になっていた言葉を紹介します。身体も心も伸び盛りの生徒たちを応援するような言葉で、私もそれから50年以上過ぎているのに忘れられない言葉です。それはこんな言葉でした。

『無力を嘆く者は多いが、本当に自分の力を知っている者は少ない。10の力の人間が12の仕事に熱中すれば、2は天が助けてくれて、やがて12が自分の力となる。』というものです。

若い中学生たちに、自分の限界を超えたところを目指して挑戦するように勧めた、校長先生の言葉でした。公立の中学でしたから「神が助けてくれる」とは言わず「天が助けてくれる」という言い方でしたが、自分のことを外から支えてくれ、成長させてくれる存在があるんだ、と校長先生は言いたかったのでしょうか。

さて、今日は復活節第6主日です。そして今週の木曜日は昇天日です。ルカが福音書の続編として書いた、使徒言行録の最初のあたりに、イエス様は復活したのち、四十日間、弟子たちに現れて神の国について話された後、オリーブ山から天に昇られたことが記されていますので、イースターから数えて四十日目を教会は「昇天日」として記念しています。

ちなみに、教会ではその10日あとに、聖霊が降ったことを祝う「聖霊降臨日」というのが設定されていますが、これはほんとうに復活から50日目だったかどうか、わかりません。ヨハネによる福音書では、イエス様は復活した日の夕方、弟子たちのところに現れて、弟子たちに息を吹きかけて、聖霊を受けなさい、と言っています。復活の日に、聖霊が与えられたような印象です。

ところがルカの書いた使徒言行録2章には、五旬祭の日が来て、聖霊が降った、とあります。五旬祭というのは50日ということです。エジプトを脱出したことを祝う過越の祭から50日という意味であり、農業面ではイスラエルでは小麦の収穫祭でした。そして宗教的には、モーセたちがエジプトを出て、シナイ山で神様から十戒に代表される、宗教的な掟、律法を授かった日ということになっていました。

このユダヤ教の律法授与の記念日が、過ぎ越しの祭りから50日目の五旬祭だったのです。この日には世界中からユダヤ人がエルサレムの神殿に集まりますが、その時、弟子たちに聖霊が降った、というわけです。

イエス様が復活してから50日目に聖霊が降ったという風に理解するのは、キリスト教の勝手な解釈です。ユダヤ教の、過越の祭りから50日目の伝統的なお祭りの日に、キリスト教は、その記念日を変更するのではなく、その意味を変えて引き継いだわけです。

大切なことは、イエス様が復活されて、神様のもとへ帰られると、それに代わって、弁護者と言われる聖霊が降ったということです。そしてユダヤ教の掟を守るのではなく、イエス様が与えてくださった、新しい掟を守ることになった、という解釈がいいのではないか、と思います。

以上、教会の暦について、特に間近に迫った昇天日や聖霊降臨日との関連のお話でした。しかし、今日の福音書は、イエス様が復活されてからの出来事ではありません。イエス様が十字架に架けられる前の晩に、弟子たちに向かって話された言葉です。

イエス様は「自分はこれから逮捕され、殺されて、あなた方のところから去ってゆくが、代わりに弁護者である聖霊がやってきて、あなたと一緒に住む。」と言うのです。

弟子たちは、先生が自分たちから離れて、自分たちはみなしごのように取り残される、という淋しさを感じているのですが、イエス様は、ご自分に代わって、強い弁護士のような聖霊が来るから大丈夫だ、とされているんですね。

今日の福音書の少し前には、イエス様が「わたしの父の家には住む所がたくさんある。」と言われてたり、「わたしは道であり、真理であり、命である。」という有名な言葉を話されています。そしてその終わりの方に、弟子たちに向かってすごいことを言われています。

『はっきり言うておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によって栄光をお受けになる。わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう。』(ヨハネ14:12~14)

イエス様はご自分が父なる神様のところへ行けば、残された弟子たちは、イエス様がおこなっておられたことを引き継ぐだけでなく、それ以上の仕事をするようになる。イエス様に願ったら、何でも叶えてやろう、とまで言われるのです。

ちょうど、私が中学の時、校長先生が、自分の実力以上のものに熱中したら、天がそれを助けてくれるから、あきらめないで挑戦しなさい、と話されたのと結びつくように思います。

それは、イエス様に代わって、弁護者である真理の霊、聖霊が助けてくださる、ということでしょう。

私は最初に中学校の時の、校長先生の話をしてしまいましたが、それと並んで、神学校で旧約聖書を学んでいた時の先生の言葉を思い出してしまいます。

その先生は、神様がどのような方であるか、ということ面白い言葉で説明してくださいました。どこかで紹介したこともあると思います。

出エジプト記という旧約聖書の2番目の書物。その3章では、モーセが神様に呼ばれて、エジプトのイスラエル人を救い出すように命じられます。そこでモーセは、神様にあなたの名前は何と言われるのか、人々に質問されたらどう答えましょうか。お名前を教えてください、と頼みます。すると神様は、14節で『わたしはある』という者だと答えられました。今度の聖書協会共同訳では「私はいる」となっているんですが、40年以上前、私が習った旧約の先生は、『私がある』と訳すべきだと言われました。

「わたしは」と言うのと、「わたしが」と言うのでは、「わたしが」の方が主語を強調している。そして、あなたと共にいる私を信頼しなさい、という絆を感じさせ、決して他と比べているわけではありません。

エジプトへ派遣されるモーセが、不安を抱いている時に、「わたしがいるじゃないか。一緒にいてやるから、安心して行きなさい。」というイメージがあるのです。

若い中学生が、難しい課題に取り組む時、天が助けてくれる、ということ。イエス様が離れてゆこうとする時、代わりに共にいてくれる聖霊があるということ。

これら「主（神様）があなたとともにいる」、インマヌエルということを私たちは信仰の中で確信を持つことが大切なのではないのでしょうか。

弟子たちと共に過ごしておられたイエス様が、神様のもとに帰られることを記念する昇天日が、今週の木曜日にはやってきますが、いつも私たちと共にいて下さる神様に信頼して、歩む者でありたいと思います。